

まちやむら、そこに住む人びと (=ざいち) の、
知恵や生き方 (=ち) から学び、実践する活動です。

京都大学
生存基盤科学研究ユニット
東南アジア研究所「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」・
「ベンガル湾縁辺における自然災害との共生を目指した在地のネットワーク型国際共同研究」

京都 清滝
くれない茶屋の桜並木

亀岡フィールドステーション

右京区制80周年記念事業に昔の清滝集落写真を展示

亀岡FS 研究員 豊田知八

3月12日から21日にかけて、京都市右京区役所を会場として開催された「昔の写真展～右京のあゆみ」に、私の所有する清滝集落の古い写真を展示していただいた。この写真展は、平成23年度に区制80周年を迎えた、京都市右京区の記念事業^[1]の一環として開催されたもので、市と市民でつくる実行委員会が企画したイベントだ。写真展には、市民から提供された明治から平成までの貴重な写真300点以上が展示され^[2]右京という町の移り変わりを写真で伝える催しだ。



会場のような

私が提供した写真は、初公開となる「清滝川の舟下り」をはじめ「ますや」、「かぎや」といった旅館や、廃路線となった「愛宕山ケーブルカー」が走る風景など、清滝が最も華やかなりし昭和初期の写真を中心に計14点で、展示に関しては実行委員会のご厚意により「清滝コーナー」を設けてもらった。

今回この企画に参加するきっかけとなったのは、藤田

裕之右京区長との面会だった。今年2月初旬に私からお願いし、清滝集落の課題や展望等について意見交換をする機会を頂いた。その中で、人口20万人以上を有する右京区にあり、嵯峨自治会の一町内に過ぎない、僅か50人ほどの清滝集落の存在はあまりにも小さい。区としても詳細な情報や現状把握が乏しい状態であることもわかった。面会で、集落の現状を知った区が協力する形で、今回の記念事業への出展を働き掛けて頂いた。

区の発表によると、写真展の会場となった区役所エントランスには、連日、昼夜を問わず大勢の鑑賞者が来場する盛況となり、住民からは「当時を思い出す懐かしい写真ばかり」「右京がどのように移り変わったかがよくわかった」などの感想も多く寄せられるなど、関心度の高さを表せた^[3]。私も3度、会場へ足を運んだが、清滝コーナーの前には多くの鑑賞者が足を止め、熱心にご覧になられていた。なかには「ますやとかぎや、この頃は賑やかやったな～今は見る影もなく寂れたけど・・・」といった少し残念な話し声も聞こえてきた。しかし清滝集落の存在を地域にアピールする、いい機会になったことを私は率直に喜びたい。また、右京区を故郷とする私にとってもこの写真展は、郷土の歩みを写真で認識でき、あらためて郷土への愛着が深まったと感じている。この写真展に参加できたことで、行政との協力関係が築けたことが、何よりも今後の活動に当たり心強い。この企画に際し、ご尽力いただいた藤田区長はじめ関係者の皆様に感謝申し上げる次第である。

- [1] 区では23年度の一年間を通じ、様々なイベントを開催。写真展はそのフィナーレを飾るイベント。
- [2] 太秦や嵯峨、山内西院といった市街地から越畑や水尾といった山間地まで広範囲の風景写真が展示。
- [3] この写真展の様子は、NHKの報道ニュースや京都新聞17日付けの朝刊にも紹介された。

守山フィールドステーション

フィールドステーションの移転 — 新しい“寄り合いの場”のご案内 —

守山 FS 代表 高谷好一
研究員 嶋田奈穂子

守山フィールドステーションの移転

守山市梅田町にあったフィールドステーションは、2012年3月末日をもって移転しました。これは大家さんのご都合によるものです。しかし、同時にちょうど生存基盤科学研究ユニットの研究活動の一つの締めくくりの時点でもありましたので、良いタイミングだったということになるのかも知れません。

私は、仲間を作るのに最も手っ取り早い方法は“溜り場”を作ることであると確信しております。振り返ってみますと、私自身は溜り場で育てられてきたのだと思います。

学生時代は山岳部と探検部の部屋に入り浸りでした。東南アジア研究センター時代には、“東南亭”と名付けた部屋がありました。ここには20年間居りました。滋賀県立大学に来てからは、人間文化学部棟3階の“307”と呼んでいたゼミ室がありました。そこには9年間おりました。その後、“守山の家”と皆様に呼んでいたという拠点を作ったのですが、それが今年で10年になります。この“守山の家”の後半期間が、守山フィールドステーションも兼ねることになったのです。

この部室、東南亭、307、守山の家は、それぞれに皆、大変大きな働きをしてきたと考えています。多くの人たちがそこで杯を交わし、夢を語り合い、それを肥やしにして仕事をしてきました。少なくとも私自身はそうでした。誇張ではなく、今日の自分があるのは、溜り場のおかげであると考えています。

さて、公式のフィールドステーションはこうしてこの3月末で終了しました。そして、4月からは私的な溜り場ができました。文字通り、私のための溜り場と考えております。自分が楽しむための溜り場です。守山駅前にあるマンションの一室ですが、ここでこれまでの活動を継続・展開していくつもりです。一人でも、二人でも、“これは自分の溜り場だ”と考えて訪れてくださる仲間をお待ちしております。(高谷好一)

中山道守山宿 「うの家」

これまで毎月の定例会には守山フィールドステーションを使っていたいただきました。ムラの“寄り合い”に限りなく近い雰囲気、膝と膝を突合せて、多くの議論やネットワークの形成を行ってきました。これは新年度も継続して行われますが、守山フィールドステーションの移転にともない、新しい定例会・研究会の場として、中山道守山宿にある歴史文化ものづくり館「うの家」を最大限活用させていただく予定でありますので、お知らせいたします。

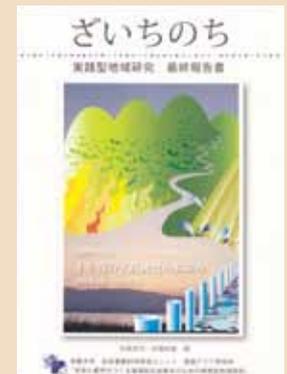
「うの家」は中山道守山宿に残されていた明治初期建築の造り酒屋を改装した、守山市の歴史・文化・ものづくりの発信拠点です。この「うの家」の蔵や座敷などが、貸しスペースとして市民が活用できるようになっています。今後はこの「うの家」のスペースをお借りして、より活発に、そしてより地域にオープンな定例会・研究会を開いていく予定です。皆様のご参加をお待ちしております。(嶋田奈穂子)



中山道守山宿にある「うの家」

報告書の出版

『大川活用プロジェクト平成23年度活動報告書』と『ざいちのち 最終報告書』を出版いたしました。5月には実践型地域研究推進室ホームページ (<http://cseas.kyoto-u.ac.jp/pas/>) にアップロードする予定です。



新潟県山北町山熊田の焼畑

滋賀県立大学 黒田末寿

私たち火野山ひろばが、余呉町中河内で初めて本格的な焼畑の火入れができた2007年8月の同時期に、もう一つ焼畑を復活させた集落がある。新潟県村上市山北町の山熊田である。山熊田は、羽越本線府屋駅から東に車で30分ほど入った山形県よりの山間にあり、戸数21軒、70人ほど。焼畑の復活は集落あげての地域興し事業で、30年ぶりだったと言うから、1970年代の終わりまでやっていたことになる。また、山熊田はシナノキ布の数少ない産地としても知られ、住民が共同出資して建てた「さんぼく生業の里」で、焼畑のカブラの漬け物とシナノキ布を作って販売している。この3月の終わりに山熊田を訪ね、60歳代70歳代の女性5人に焼畑について教えてもらった。その全員が、大滝さんで、とくに朝子さんとトメ子さんにお世話になった。



生業の里・漬け物をパック

昔と今の焼畑

焼畑のことは、ナギノ、あるいはヤキバタと言った。昔は家族単位でやっていたから、隣に「ナギノしたか」とか「ヤキバタしたか」と声をかけていた。ナギノには、杉林の伐採跡と雪崩場のようなクサノ(草場)の2種あったが、とくにこれらを分ける名称はなかった。

クサノにはカヤと湿ってないがヨシがはえる。木を切らんでいいから、3年に1回の割で焼いて1年だけ使っていた。杉林の伐採跡は、火入れは杉葉で1年目(アラバタケ)だけ。除草はしなくてよかった。ソバを植えると2年目は焼かずにアズキを植えた。カブラ、大根を植えると2年目は焼かずに、アズキ、アワを植えた。2年使って、3年目に杉苗を植えた。

カブラは昔から温海カブラだが、白カブラも一部植えることがあった。大根はずんぐりした紡錘形で山大根と呼んだ。白菜も植えることがあった。杉林の跡は、3年目に杉を植えても植えなくても放棄(アラス)した。

ナグのは、鎌で丁寧な土を削るように、掘るみたいに

草の根を抜くことだった。一人だと一反ナグのに、1週間以上かかったと思う。今は、草刈り機で土を削るように切っただけですましている。個人で1、2反、生業の里で2、3反やっている。

山焼き(火入れ)は8月初めの夕方。燃やすものをヤケグサという。燃え残りを一カ所に集めて焼くことをノゾミヤキ(余呉でのコツヤキである)という。今は男が大勢手伝っているが、焼畑はほとんど女の仕事だった。男は稼ぎに行っていた。火を入れた後、まだ地面が暖かいうちに種を蒔き、下から上へ鋤で軽く耕した。今は、焼いた後、鋤を入れずに播種する。鋤入れして種が土の下に潜ると、カブラの下部が白くなって、温海カブラらしくなくなるからというのが理由。収穫は9月~12月まで小ぶりのうちに順次とる。総量は1m²当たり、玉重量で2kg以上あると思う。生業の里では、個人の畑の分は10kgで2000円から3000円で買う。漬け物にして、350gパックを550円で販売している。

アラシタナギノはとくに利用していない。ワラビが生えるところもあるし生えないところもある。

食べ方

ナギノで大根や白菜に味噌をつけて食べると、それは美味しかった。昔は、カブラは陰干ししてやわこうなったものを、打ち豆、昆布と煮物にした。味付けは醤油で、カブラの甘みがあって美味しかった。大根は飯にも入れたが、カブラは飯に入れなかった。今は9月の終わりから12月の初めまで、小ぶりの段階で順次とって、干さずに砂糖と酢で甘酢漬けしている。表面の紫色は紅色になり、中はやや濃い桜色に染まる。

生業の里でもトメ子さんの家でも、カブラの漬け物をいただきながらお話を聞いた。味は浅漬けに近く、ピリッと辛みが残って美味しい。トメ子さんの家では、囲炉裏跡においても暖かく、そばでご主人がシナノキの繊維で細縄を編んでおられた。



生業の里シナノキ織り

催しのご案内

■第45回 定例研究会

1. 日時 2012年4月27日(金) 17:00~19:00
2. 場所 滋賀県守山市守山1丁目10番2号「うの家」
3. 4年間の実績を踏まえ今後の活動の継続の基盤をつくるために支援協会構想の内容について発表し、各FSが構築してきた社会再生モデルについて、各FSの立地の地

域性を踏まえて議論します。

4. 発表者 安藤和雄(京大東南アジア研究所)

★開催場所と開催時間が今月から変更になりました

★以上の催し物への参加ご希望の方は、
京都大学 東南アジア研究所 実践型地域研究推進室
担当:安藤和雄(ando@cseas.kyoto-u.ac.jp) までご連絡ください。

「ざいち」から「ざいち」へのエール

—「震災一年後の東北に行く」—

東南アジア研究所 中村均司

東日本大震災から一年が経過した3月下旬、東北に足をはこんだ。連日の雪模様で、内陸部の田畑は、まだ、すっぽりと雪に覆われている。道路沿いの気温表示板は0℃前後を示し、仮設住宅や避難されている方々を思うと、春の雪は重く、冷たく感じられた。また、短い滞在中に震度3と震度5の地震があった。

釜石、塩竈、松島、石巻では、地震と津波の爪痕が残り、壊れた建物などの後片付け作業が行われていたが、元の姿と活気が戻るには、どれくらいの月日がかかるのだろうか。

仙台から石巻をつなぐ仙石線の松島海岸駅と矢本駅の間は、列車代行バスが運行している。地元の高校生や住民と一緒に乗るバスの車窓からは、基礎だけ残った家並みや水に浸かったままの土地が見える。壊れたままの駅と傾いた架線支柱は、津波の方向と力を見せつけ、さびたレールに覆いかぶさる枯草は、震災で止ったままの時間・状況をものがたる。

除塩作業が行われている水田もいくつか見られた。被災した8県36市町村で被災農家が集まり、118の復興組合が組織され(平成23年12月31日の数字)、重機による大がれきの撤去、手作業による小がれきの掘り起しや拾い集め、除草が行われてきたという。

石巻では、商店街のところどころに空き地が目立ち、観光施設「石ノ森漫画館」「慶長使節船サンファン号」が津波の直撃を受け、営業停止状態が続く。しかし、街を歩くと、人影は少ないが、訪れる人を迎えるあたたかさの余韻が、今も感じられ、大打撃を受けたご当地グルメの「石巻焼きそば」は、「希望の石巻焼きそば」として復活してきている。

雪の中、花巻市内にある宮沢賢治ゆかりの場所を訪ねた。宮沢賢治の生きた明治29年から昭和8年は、戦争が多く、地震や津波、凶作や不景気などで不幸に悲しむ人が多かった時代であった。賢治が生まれた年の

1986年(明治29年)6月15日、岩手県釜石市の東方沖200kmを震源とするマグニチュード8.2-8.5の巨大地震と津波によって、死者21,915人、行方不明者44人の大きな被害が出ている(明治三陸地震津波)。このときの津波は、当時の本州における観測史上最高の遡上高・海拔38.2m(現・大船渡市)が記録されている。賢治が没する年の1933年(昭和8年)3月3日、釜石市の東方沖約200kmでマグニチュード8.1の地震が起き、強い上下動によって発生した大津波が襲来し、死者1,522人、行方不明者1,542人の甚大な被害となった(昭和三陸地震津波)。多数の行方不明者は、津波の引き波により海中にさらわれた人が多かったからといわれる。

賢治は当時の労多く貧しい農民の生活を豊かにするため、思想、詩・童話、科学、宗教をもって実践し、力を尽くし、命を切り縮めたといってもよい。岩手県立花巻農学校の教員を退職し、私塾である羅須地人協会を設立したのは、生徒に対して「農民になれ」と教えながら、自らが俸給生活をおくっていることへの葛藤であったと推定されている。

列車代行バスの中では、カメラのシャッターを押せない場面もあったし、私自身、何ができるのだろうか、自問しながらの旅であった。旅の間は、見いだせなかった答えだが、今なら、言えそうなことがある。それは、被災地を見、その土地のものを食べ、口数は多くはなかったが、土地の人と言葉を交わしてきたことである。旅から帰り、テレビのニュースなどで訪れた土地のことが放映されると、気になるようになったことである。被災地全体に対する「地域・コミュニティ主体の復興」がかすんでいくことへの心配である。そして、「ざいち」から「ざいち」へのエールと、そのことの「自覚」といえばいいすぎるが、この出来事が時間の経過とともに薄れ、忘れられていくことへの自戒の思いを強くしたことである。機会をつくり、また、東北へ足をはこぼう。



水田の復旧と除塩作業(東松島市)